

## 文化大革命期に作成された個人資料の教育史研究への応用

### —「天津市紅橋区煤建公司従業員関係檔案」について—

戸部 健

#### はじめに

中国近現代史研究における史料と言え、これまでは書籍や新聞、雑誌などといった刊行史料が一般的であった。しかし近年では、刊行されていない史料を使用する研究も増えている。未刊行史料にもいろいろあるが、なかでも中国の公的機関で作成された檔案（公文書）を史料として利用する研究が軒並み増加している。その背景には、この 20 年ほどの間に檔案の對外開放が進み、中国人だけでなく外国人も檔案にアクセスしやすくなったという事情がある。とくに上海市の檔案館（公文書館）は最も開放的で、文化大革命以前の檔案であれば基本的に閲覧できるという<sup>1</sup>。もちろん、上海市のような例は極めて稀で、ほとんどの檔案館では閲覧に際して依然として高いハードルを課している（1ヶ月前までに閲覧申請をする、特定時期の史料は公開しないなど）。とは言え、政権の状態にもよるが、檔案の開放は、今後もある程度続くことが予想される。

上で述べたように、檔案は基本的に檔案館に所蔵されているが、実はそれ以外の場所にも存在する。その代表的なのが古物市場で、何気なく物色していると突然檔案の山に突き当たることがある。そこで目にする檔案の多くは、企業などでの資料整理の際にゴミとして出されたものや、個人が所有していたものを古物商が安値で買い取ったものなどで、状態は必ずしもよくない。しかし、場合によっては研究を進める上で有用、かつ現時点において檔案館での閲覧が不可能な檔案史料に出会うこともある。

本稿で紹介する「天津市紅橋区煤建公司従業員関係檔案」<sup>2</sup>はまさしくそのようなもので、筆者が 2005 年頃に天津市の古物市場（天津市古旧図書交易中心）<sup>3</sup>で偶然発見し、買い求めたものである。本史料は、天津市紅橋区煤建公司という企業に関する文書ファイルの 1 つで、従業員 127 人分の履歴書が綴じられている。履歴書の大半は文化大革命中の 1973 年および 1974 年に作成されたものであるが、一部文革後の 1978 年に作られたものも混じっている。

本稿であえてこの史料を紹介するのは、次のような理由による。（1）1つの団体の構成員に関する比較的まとまった史料であること。（2）文革期の民衆史・教育史・家族史研究にとって有用な史料であること。（3）1人ひとりの履歴を辿ることで中華民国期の状況を

<sup>1</sup> 金野純『中国社会と大衆動員—毛沢東時代の政治権力と民衆—』御茶の水書房、2008 年、11 頁。

<sup>2</sup> 本史料は、後述するように、「工作人員登記表」と「天津市紅橋区煤建公司職工履歷表」という書類が綴じられたファイルであるが、ファイル自体の正式な名称は不明である。従って「天津市紅橋区煤建公司従業員関係檔案」という名称は、ファイルの内容を勘案した上で筆者が便宜的に付けたものである。

<sup>3</sup> 天津市古旧図書交易中心については、拙稿「山西省図書館・天津図書館利用案内」『中国都市芸能研究』2 輯、2003 年、に詳しい。なお、同所はその後移転などを繰り返しており、2009 年現在、消息不明である。

も知ることができること。

このように、本史料は中国近現代史研究にとって有益な情報を多く含んでいる。従って以下では、まず本史料の背景や内容について紹介する。その上で、本史料を、筆者が専門としている教育史にどのようなかたちで応用できるかについて、初歩的な検討を行いたい。

なお、当然のことながら、本史料には膨大な数の個人情報が含まれており、その取り扱いについては特に慎重を要する。そのため本稿では、個人について言及する場合は、姓名を用いず、表 1（内容については後述）の整理番号で表すようにする。

## 1. 史料の背景について

ここでは、本史料が作成された背景について、（１）企業が所在する地域、（２）企業の業務内容という 2 つの側面から概述する。

### （１）天津市紅橋区煤建会社が所在する地域について

天津市紅橋区煤建会社は、その名称からも分かるように、天津市紅橋区に所在していた企業である。

紅橋区は、天津市の都市部を構成する 6 区（和平区、河東区、河西区、南開区、河北区、紅橋区）のうちの 1 つで、都市の西北部に位置している。その領域は比較的広く、それゆえ人口も多い。1994 年の資料によると面積は約 21 平方キロメートル、人口は 547,579 人となっている<sup>4</sup>。

紅橋区の特徴を一言で説明するのは難しい。というのも紅橋区は、色合いが異なる様々な地域を包含しているからである。例えば、区の南東部にある估衣街は、20 世紀前半まで天津で最も繁華な場所として知られていた。それゆえ現在でもこの一帯は商業の盛んな地域となっている。それに加えて、同地域は天津における近代工業の発祥地としても知られており、かつては紡績工場やじゅうたん工場などさまざまな工場が所狭しとおり並んでいた。その後工場はだいぶ減ってしまったが、当時の名残は今も残っている。一方、区の南西部は住宅地で、以前は狭い道を挟んで多くの家が密集していたが、現在それらの多くはマンションに変わっている。また、区の北西部はもともと市区から外れた農村であったが、共和国期に紅橋区に編入された結果開発が進み、現在ではマンションや工場が立ち並んでいる。

天津市紅橋区煤建会社の本社が紅橋区内のどこにあったのかは、残念ながら今のところよく分からない。ただ、本史料に関する人々が、どこで働き、どこに住んだのかについては、履歴書の記載からある程度見当をつけることができる。それによると、ほとんどの人が小西関基層店（支店）、長虹基層店など、区南西部の小西関・南頭銚街道（区の下位単位）内の基層店で働いていた。また、紅橋区の南東部や隣接する南開区の北部に居住する一部の者を除いて、多くの人が職場付近に住んでいた<sup>5</sup>。ここから、本史料は、天津市紅橋区煤建会社の従業員の中でも、特に紅橋区南西部の基層店で働き、そこを中心とする一帯で生

<sup>4</sup> 《天津市》編纂委員会編『中華人民共和国地名詞典—天津市—』商務印書館、1994 年、131 頁。

<sup>5</sup> 地名の比定については、紅橋区人民政府編『天津市紅橋区地名録』天津市紅橋区人民政府、1988 年に拠った。

活していた人々に関係するものであることが分かる。

## （２）天津市紅橋区煤建公司について

天津市紅橋区煤建公司について現時点で分かることは、石炭（特に豆炭および穴あき練炭）と建築器材の販売を主な業務とする公営企業だったということだけである。それ以上のことは、手元に資料がないため、現在のところよく分からない。ただ、同様の企業は他区にもあり、業務内容や来歴を確認できるものもある。以下では、参考までに和平区の例を紹介する<sup>6</sup>。

天津において石炭の販売は、人民共和国成立まですべて私営業者によって担われていた。それが、1950年代以降徐々に公営化されていった。和平区では、50年代前半の公私合営前の段階で、私営の業者が130軒あったとされるが、1955年にはそのすべてが公営化され、その後成立する煤建公司の基層店となった。1958年4月には、区内の石炭・建築器材・ミネラルウール・木材関係の企業および燃料用柴草業の石炭部門が合併して和平区煤業建築器材零售公司が成立、それが同年10月には和平区煤建公司となった。その頃になると煤建公司が取り扱う商品は石炭・建築器材・ミネラルウール・木材・衛生食器・ロープ用の麻・金属部品にまでわたっていた。ただ、その後同公司の業務範囲は徐々に縮小していく。1960年代半ば以降になると、煤建公司の取扱品は石炭と建築器材のみとなった。本史料が作成されたのは、まさにこの時期であった。なお、和平区煤建公司はその後若干の転変を経ながらも存続し、1992年に天津市煤業建築器材和平公司と社名変更して、今に至っている。

以上は和平区の例だが、紅橋区の状況もそれほど違わなかったと考えられる。

## 2. 史料の内容

本史料は、上でも述べたように127人分の履歴書をファイルに綴じたものである。本節では、史料の形式について、ファイルと履歴書それぞれに分けて紹介する。

### （１）ファイルの形式

履歴書は、「幹部檔案」と横書きされた紙製のファイルに綴じられている。「幹部」と書いてあるので、会社の幹部の履歴書が綴じられていると当初考えたが、履歴書の「現任職務」欄を見るとそれぞれ「工人」・「運輸」・「記帳員」・「司称員（計量係）」・「出納員」・「送媒員（石炭配達員）」・「保管員」などと書かれており、幹部というよりは一般的な従業員と考えた方がよさそうである。

ファイルの状態は図1からも分かるように、非常に悪い。第一、表紙の下半分が破り取られてしまっている。筆者が購入した時点ですでにこのようになっており、それまでの保存のあり方に問題があったと考えられる<sup>7</sup>。

ファイルには中扉が挟みこまれている。中扉は白紙で、右端にタグが張られている。タ

<sup>6</sup> 以下の記述については、和平区地方志編修委員会編著『天津市和平区志』上冊、出版地出版年不明、294～296頁に拠っている。

<sup>7</sup> 天津市古旧図書交易中心では、多くの店が露天で古本を販売していた。建物（廟）を間借りした店舗もあったが、そうした店舗でも資料の保存については無頓着であった。

グには次のような文字が書かれているが、それらはすべて紅橋区小西莊街道および南頭窩街道にある地名である。

小西莊主媒・南頭窩・芥園・教場・三元村・慶豐里・西関外・長虹・永新・後場・賀樸後・三益里・復興路・基層店

中扉のあとに履歴書が数枚続くことから、当初筆者は、基層店ごとに履歴書を分けているものと考えたが、その後タグと履歴書の「単位」欄の記載に齟齬が多いことが明らかになった。ゆえに、タグの意味については今でもよく分からない。

## （２）履歴書の形式

履歴書のフォーマットには、「工作人員登記表」（表裏１枚：図２）と「天津市紅橋区煤建公司職工履歴表」（表裏１枚）の２種類ある。履歴書のほとんどが「工作人員登記表」だが、一部年齢の若い人を中心に「天津市紅橋区煤建公司職工履歴表」が使われている。なお、１人の人間に対して、２種類のフォーマットを使用している例は存在しない。すなわち、履歴書の重複はない。

まずは、「工作人員登記表」の欄構成から紹介する。

### （表面）

- A. 単位（所属）、書類作成年月日
- B. 姓名——現名、原名、曾用名（かつて使用した名前）、性別、年齢、出生（出生年月日）の各欄を含む
- C. 出身（出身階級）、成分（階級区分）、民族
- D. 文化程度——原有（従来の学力）、現有（現在の学力）の各欄を含む
- E. 籍貫（本籍）、現住址（現住所）
- F. 職別、現任職務、級別、工資（給料）
- G. 政治面目（政治的立場）——何時（いつ？）、何地（どこで？）、何人紹介（誰が紹介した？）の各欄を含む（共産党または共産党青年団への入党・入団に関して）
- H. 何時何地怎樣参加工作（いつ、どこで、どのように今の仕事に参加したか？）
- I. 婚否（婚姻の有無）、愛人姓名（配偶者の姓名）、政治面目、在何処任何職（どこで、どのような職に就いているか？）
- J. 全家人口、全家総収入、平均生活費、糧食定量
- K. 参加過何種反動組織及歷史上有何重大歷史問題結論否（どのような種類の反動組織に参加したことがあるか？これまでどのような重大な歴史的問題について結論を得たか？）
- L. 何時何地受過何種獎勵（いつ、どこで、どのような獎勵を受けたことがあるか？）

### （裏面）

- M. 簡歷——年月至年月、何地何部門（どこの何部門に所属していたか？）、任何職（いかなる職に就いていたか？）、証明人の欄を含む

- N. 家庭主要成員——姓名、關係（本人との關係）、政治面目、何單位任何職（どの單位でどのような職務に就いているか?）、現住址の欄を含む
- O. 主要社会關係——姓名、關係、政治面目、何單位任何職、現住址の欄を含む

一方、「天津市紅橋区煤建公司職工履歷表」の欄構成は以下のようになる。

（表面）

- A'. 姓名——現名、原名、性別、年齢、民族の欄を含む
- B'. 家庭出身、個人成分、政治面目
- C'. 文化程度、特長、婚否
- D'. 籍貫、参加工作時間（職務に参加した時期）
- E'. 現住址、健康狀況、来津日期（天津に来了時期）
- F'. 家庭主要成員及經濟狀況——姓名、性別、年齢、政治面目、工作单位、職別、收入、是你甚麼人（本人との關係）の欄を含む
- G'. 主要社会關係——姓名、性別、年齢、政治面目、工作单位、職別、收入、是你甚麼人の欄を含む

（裏面）

- H'. 何時・何地經何人介紹參加過何種反動党・団・会道門及其他反動組織、任過甚麼職務甚麼時候脫離的關係（いつ、どこで、誰の紹介を経て、どのような反動的な党・団体・秘密結社およびその他の反動組織に参加したことがあるか?どのような職務に就いたことがあるか?いつ關係を離脱したか?）
- I'. 何時・何地經何部門審查結論如何（いつ、どこで、どの部門の審査を経て、どのような結論にいたったか?）
- K'. 個人簡歷一時間、在何地・何部門・任何職（どこで、どの部門で、どんな職に就いたか?）、証明機關或証明人

以上が「工作人員登記表」と「天津市紅橋区煤建公司職工履歷表」の欄構成である。両者の違いはそれほどないが、情報量の面で「工作人員登記表」のほうが若干勝っている。

各欄の記述内容はどれも興味深い。例えば C 欄と B' 欄の記述を見れば、彼らがどのような家庭に生まれたのかを知ることができるし、また、M と K' の欄からは、彼らがどこで暮らし、働いてきたのかについて知ることができる。また、D 欄や C' 欄の記載からは、彼らの受けた教育についての情報を得ることができるし、N 欄や F' 欄からは、彼らがどのような家庭に属しているのかを知ることができる。さらに、彼らがどのような人たちと親しく交流していたのかということでさえ O 欄や G' 欄の記述から明らかになる。

もちろん、個々の記述を無批判に信じることは慎まなければならない。ただ、それに注意すれば民衆史や教育史、家族史の研究において十分に利用価値のある史料となりうると考える。

### 3. 教育史への応用

本章では、本史料の教育史研究への生かし方について初歩的な検討を行う。研究に生かす方法にはいろいろなものが考えられるが、ここではひとまず本史料のデータをもとに、世代による学歴の違いについて考察してみたい。というのも、これまでの近代中国教育史研究において、このようなテーマを扱ったものがほとんどないからである<sup>8</sup>。

考察に先立ち、関連するデータ（「各人の性別」（B 欄と A' 欄）、「出身」（C 欄と B' 欄）、「年齢」、「生年」（B 欄と A' 欄）、「来津時期および天津での仕事開始時期」（H 欄と E' 欄）、「文化程度」（D 欄と C' 欄）、「籍貫」（E 欄と D' 欄））を、履歴書の綴じられた順番で一覧にした（表 1）。なお、その人の出身地が天津の場合、「来津時期および天津での仕事開始時期」の欄に「天津」と記入した（確定できないが、各欄の記述から総合的に判断して天津出身者の可能性が高い場合は「天津？」とした）。この表をもとに世代による学歴の違いについて、そしてさらに進んでその出身地による違いについても検討してみたい。

本史料のファイルには、1896 年生まれの人から 1960 年生まれの人まで、幅広い年齢層の人々の履歴書が綴じられている。そこで、彼らを「生年」ごとに 6 つ（I ～ VI）に分類して、それを「文化程度」欄のデータとクロスさせてみた。さらに、それによって得られた結果を「来津時期および天津での仕事開始時期」のデータにもとづいて天津出身者とそうでない者とに分けた（「天津？」となっている人についても、天津出身者に入れている）。そのようにしてできたのが、表 2 である。以下、各世代における学歴の特徴について、出身地ごとに簡単に指摘する。

### I 1896 年から 1909 年までに生まれた人

多くの人が、不識字か、私塾での教育止まりである。たとえ小学校に通ったことがあっても初等小学校で 1 年学んだ程度であった。それでも天津出身者のほうがそれ以外の出身者に比べて学歴が高い。唯一の初等小学校経験者も天津出身の人間である。一方、天津以外の出身者では、全体に占める不識字者の割合が高い。

### II 1910 年から 1919 年までに生まれた人

学校経験のない者と不識字の者とが占める割合が依然として大きい。ただ、私塾で学業を終えた者の割合が減少し、それに代わって初等小学校で学んだ者の割合が多くなる。高等小学校に上がった者も少しずつ出てくる。

天津出身者について言うならば、全体の 3 割程度の人が学校経験なしの不識字であるが、それ以外の者はみな小学校に通った経験を持つようになり、高等小学校に進学する者も出てくる。そして、私塾で学業を終えた者はいなくなる。それに対して天津以外の出身者では、学校経験がない者と不識字者で約半分を占める。小学校に通った者も出てくるが、私塾しか出てない者も依然として存在する。

### III 1920 年から 1929 年までに生まれた人

---

<sup>8</sup> 近代以降、中国では教育に関する統計がたくさん作成された。筆者もそうした統計をいくつか見てきたが、世代別の学歴についてまとめた統計は今のところ見ていない。世代による学歴の違いに関する研究が少ないのには、そうした要素も影響しているように思える。

学校経験のない者や私塾で学業を終えた者の割合が大きく減退し、大部分の者が初等小学校に通った経験を持つようになる。なかには高等小学校やさらには初等中学校に通った者も登場するようになる。

そうした傾向は、天津出身者において特に顕著である。小学校経験のある者の割合は 8 割に達し、高等小学校在籍以上の学歴を有する者の割合も 4 割を超える。ただ、天津以外の出身者におけるそれらの割合は天津出身者に比べるとかなり少ない。また、私塾出の者も依然として 2 割程度いる。

#### IV 1930 年から 1939 年までに生まれた人

学校に通ったことがない者や私塾しか出ていないという者は、遂にいない。全員が初等小学校通学以上の学歴を持つようになり、高等小学校や初等中学校に在籍したことのある者の割合もそれまでと比べてかなり大きくなる。

天津出身者に高等小学校在籍歴のある者はいないが、その代わり 4 割の者が初等中学校に在籍した経験を持つ。対して天津以外の出身者では、高等小学校に在籍歴のある者が約 3 割いるが、初等中学校に在籍したことのある者はいない。

#### V 1940 年から 1949 年までに生まれた人

V 以降では、天津以外の出身者の割合が非常に少なくなるため、天津出身者の情況にのみ言及する。

いよいよ高等小学校在籍以上の学歴を持つ者の割合が、初等小学校までしか出ていない者の割合を超えるようになる。さらに、初等中学校への進学者も全体の 5 割に達し、そのうち 1 割が高等中学校に進学した経験を持つ。また、少数であるが、高等中学校や中等専門学校に進学する者も出てくるようになる。

#### VI 1950 年から 1960 年までに生まれた人

とうとう全員が初等中学校在学以上の学歴を有するようになる。ただし、高等中学校に進む者は依然として 1 割程度である。

もちろん、以上は天津の一企業という限定された範囲内での結果にすぎないのであって、この結果をもって天津全体の状況を説明できるわけではない。他の団体を調査すれば、これと異なる結果が出る可能性もある。ひとまず、各人の履歴などから判断すると、本史料については、全体として①天津以外の地域から来津して労働者になった者およびその子孫が多い（なかでも河北省定興県出身者が多い）、②中華民国期の時点で所得水準がそれほど高くない者が多い、③IVの世代までは男性の比率が圧倒的に多い、といった特徴があることを念頭に置かなければならない。

ただ、今後ほかの団体における同様の事例について検討し、その成果をそれぞれ組み合わせれば、全体の状況が少しずつ明らかになっていくものと考ええる。

また、本史料からだけでも、いくつか興味深い事実を指摘することはできる。例えば、初等小学校通学歴を有する者が多いことなどがそれである。中国において、近代的初等教育が始まったのは 20 世紀初頭であるが、様々な要因によりそれはなかなか普及せず、ゆ

えに就学率（学齢児童数に対する就学児童数の割合）もしばらくのあいだ低空飛行を続けた。天津においても同様で、1910年代なかばに10%前後であった就学率は、20年代にかけて低迷を続け、30年代以降になってようやくはっきりと上昇を描くようになるが、それでも40年代なかばの段階で40%程度であった<sup>9</sup>。そうした要素を認識した上で表2を見ると、天津出身者における初等小学校通学経験者の多さはやや意外に感じる。確かに、初等小学校に通っても多くの者が1～3年程度で退学しており、卒業した者の割合はそれほど高くない（就学率とおおよそ一致する）。それでも、かなりの数の人が初等小学校に通った経験を持ったという事実は、就学率を引き下げる原因となった人たち（学校に通っていない人、当時は「失学者」と呼ばれた）についての認識をあらためさせる可能性を持っている。すなわち、これまで“学校に通わない人”として認識されてきた「失学者」であったが、そのような彼らも多くが学校とまったく無縁だったというわけではなく、何年か学校に通った経験を持っていたかもしれないのである。そうすると、学校に何年か通った後に退学するという行為についても、単なる落伍者という意味以外に、何か積極的なものを見出せるかもしれない。彼らが学校に行く理由について、今後検討する必要があるだろう。

それと関連してもう1つ指摘すべきことは、IからVIと世代が下るにしたがって、個々人の最終学歴が、ゆっくりではあるが確実に上昇していたということである。確かに表2を見ると、世代ごとの最終学歴の中心が私塾、初等小学校、高等小学校、初等中学校へと徐々に移り分かっていくのが分かる。これは要するに、個々人と学校との関わり方が、上で述べたような初等小学校に数年通ったら退学するというあり方から、少なくとも義務教育（4年、のちに6年）だけはしっかりと卒業し、高等小学校や初等中学校にも通うというあり方に変化したことを意味している。その転機がどの時期にあったのかを判断するのは難しい。ただ、表2に限って言うと、それはIVからVの世代のあたりにあったように見える。1930年から1949年に生まれた人たちが義務教育を受けた時代、すなわち日中戦争期から戦後国民政府期を経て人民共和国初期に至る時代に初等教育がどのように行なわれていたのか。それに関する研究はまだそれほど多くない。それだけに、特に重点を置いて検討する必要があると考える<sup>10</sup>。

## おわりに

以上、「天津市紅橋区煤建公司従業員関係檔案」の背景・内容および教育史研究への応用方法について紹介した。もちろん、本史料については、「はじめに」でも述べたように、教育史以外での用途も十分ありえる。特に、文革期の家族史研究や社会史研究にとって有用な史料のひとつとなるだろう。今後は、そうした方面での具体的な活用方法についても探っていきたい。

なお、「天津市紅橋区煤建公司従業員関係檔案」と同様の史料は、中国の檔案館や古物市場などに無数に存在する。そうした史料を発掘し、それぞれ比較検討していくことが今後必要になると考える。

<sup>9</sup> 拙稿「近代中国における通俗衛生知識」『歴史学研究』834号、2007年、38頁。

<sup>10</sup> 当該時期の教育として注目すべきものに、国民政府によって行なわれた「国民教育」という政策がある。それについては、かつて阿部宗光が「国民基本教育」『中国の教育事情』文部省調査局調査課、1949年、で簡単に紹介しているが、依然として研究が少ない。



番号	性別	出身	年齢	生年月		天津での仕事開始時期	文化程度	籍貫
				年	月			
1	男	城貧	53	1921	12	天津	小学4年	天津市
2	女	店員	22	1956	9	天津	高中	天津市武清県
3	男	店員	18			天津	初中卒	天津市大港区
4	男	貧農	58	1916	7	1930	無	河南省濮陽県
5	男	農民	58	1919		1929	私塾2年、小学4年	河北省深県
6	男	老道	53	1921	10	天津	小学	天津市
7	男	下中農	42	1932	5	1950?	小学2年	河北省定興県
8	男	貧農	53	1920	11	1934	小学5年	河北省塩山県
9	女	下中農	38	1935	2	1952	小学3年	河北省唐■屯?
10	男	工人	30	1944	12	天津	小学6年	天津市
11	男	工人	17			天津	初中	河北省青県
12	女	独労	28	1945	5	1956	中専	河北省呉橋県
13	女	工人	40	1938	11	天津	初中	天津市
14	男	貧農	57	1916		1936?	無	山東省
15	男	工人	51	1922		天津	小学5年	天津市
16	男	中農	47	1927	9	1949	小学6年	河北省定興県
17	男	貧農	55	1917	8	1934?	無	河北省静海県
18	男	工人	19			天津	初中卒	天津市
19	男	富農	55	1918		1944?	高小卒業	河北省武強県
20	男	中農	63	1910		1932	無	河北省定興県
21	女	職員	28	1945	1	天津?	初中	河北省易県
22	女	下中農	48	1925	4	1946?	小学2年	河北省深県
23	女	攤販	23	1951	5	天津	初中	天津市

(【表 1】の続き)

番号	性別	出身	年齢	生年月		天津での仕事開始時期	文化程度	籍貫
				年	月			
24	女	攤販	29	1944	11	天津	小学6年	天津市
25	男	工人	48	1925	2	1941	無	河北省新城県
26	男	下中農	41	1933	3	1946	高小	河北省阜城県
27	男	資本家	41	1933		1950?	6年	河北省献県
28	男	工人	46	1928	5	天津	文盲	天津市
29	男	工人	52	1920	12	天津?	小学1年	河北省静海県
30	男	工人	17			天津?	初中	河北省滄県
31	男	工人	19			天津?	初中	河北省青県
32	男	工人	18			天津	初中	山東省寧津県
33	女	工人	21	1957		天津	高中	天津市
34	女		17	1960	8	天津	初中	天津市
35	男	工人	54	1920	4	天津	高小	天津市
36	男	貧農	55	1917	5	1938?	無	河北省定興県
37	男	下中農	48	1925	4	1941	私塾3年	河北省定興県
38	女		27	1946	9	天津	小学6年	天津市
39	男	貧農	64	1910	7	1926?	無	河北省定興県
40	男	貧農	41	1932	6	1948	小学3年	河北省肅寧県
41	男	工人	20	1957	11	天津?	初中	河北省交河県
42	男		41	1932	3	天津?	初中1年	河北省定興県
43	女	工人	22	1955	10	天津	高中卒	天津市
44	男		56	1918	7	1951	無	山東省高唐県?
45	男	工人	23	1950	10	天津?	初中卒	山東省惠民県
46	男		46	1928	5	天津	無	天津市
47	女	工人	19	1959		天津	初中	天津市
48	男	資本家	45	1929	9	1941	小学2年	河北省故城県
49	男	中農	58	1915	11	1937	小学3年	河北省定興県
50	男						初中	
51	女	工人	26	1948	9	天津	6年	天津市
52	女	貧民	18	1955	2	天津?	初中	河北省霸県?
53	男	中農	55	1918	3	1941	私塾3年	河北省定興県
54	男	下中農	49	1924	3	1935	小学3年(私塾3年)	河北省定興県
55	男	地主	41	1933	10	1946	小学3年	河北省安次県
56	男	貧農	56	1918	12	1939(1956)	小学4年(私塾4年)	河北省静海県
57	男	工人	52	1921	9	天津?	小学1年(在天津)	河北省静海県
58	男	私代	62	1911	5	天津	高小	天津市
59	女	工人	20	1958	5	天津	初中3年	天津市
60	男	工人	25	1949	3	天津?	初中	山東省武城県?
61	男	独勞	28	1945	2	天津	高小卒	天津市
62	男	城市貧民	54	1919	10	天津	無	天津市
63	男	工人	27	1946	10	天津	高小	天津市
64	男	工人	19	1954	11	天津?	初中卒	河北省青県
65	女	革幹	20	1953	12	天津?	初中	河北省無極県
66	男	貧農	54	1919	12	1927?	文盲(業余2年)	河北省静海県
67	男	貧農	54	1919	3	1935	文盲	河南省濮陽県
68	男	工人	58	1915	10	天津	小学2年	天津市
69	男	資本家	47	1926	12	天津	初中1年	天津市
70	男	貧農	66	1907	5	1924	文盲	河北省定興県
71	女	工人	28	1945	4	天津	高小卒	天津市
72	男	工人	20	1957	12	天津?	初中	河北省

(【表1】の続き)

番号	性別	出身	年齢	生年月		天津での仕事開始時期	文化程度	籍貫
				年	月			
73	男	貧農	31	1946	1	1957	小学4年	河北省易県
74	男	工人	25	1953	1	天津？	初中	河北省保定市
75	男	貧農	47	1927	4	1947？	初小2年	河北省藁城県
76	男	中農	49	1924		1936？(45-49故郷に)	私塾1年	山東省
77	女	工人	27	1947	10		初中卒	山東省
78	男	貧農	53	1920	10	1948		河北省藁城県？
79	男	貧農	65	1908	3	1935	文盲	山東省館陶県
80	男	中農	62	1911	2	1926	小学3年	河北省房山県
81	男	業主	32	1941	12	天津？	初中	山東省寧津県
82	男	工人	19	1954	4	天津	初中卒	天津市
83	男	工人	18			天津？	初中	河北省肅寧県
84	男	船民	38	1936	7	天津	小学2年	天津市
85	男	業主	52	1921	5	天津？	初中	河北省定興県
86	男	商人	52	1921	2	天津？	小学3年	河北省大城県
87	男	下中農	63	1910		1942	小学2年	河北省任邱県
88	男	富農	49	1924	12	1947	初中	河北省定興県
89	男	中農	42	1931	11	1946？	小学	河北省呉橋県
90	女	中農	49	1924	6	1960？	小学	河北省武強県
91	男	工人	33	1945	1	天津	初中	天津市
92	男	商	44	1929	11	天津	小学6年	天津市
93	女	資産階級	27	1947	6	天津？	中専卒業	河北省安次県
94	男	工人	54	1919	10	天津	高小	天津市
95	女	業主	33	1939	12	天津？	小学卒業	河北省定興県
96	女	地主	38	1935	6	1956	小学5年	河北省武強県
97	男		24	1949	7	天津	初中	天津市
98	男	中農	25	1948	12	天津？	初1	河北省定興県
99	男	店員	22	1951	5	天津	初中卒業	天津市
100	男	職員	28	1946	1	天津	小学3年	天津市
101	男	独労	29	1943	11	天津	高中	天津市
102	男	工人	24	1944		天津？	初中	河北省静海県
103	男	工人	38	1935	6	天津	小学2年	天津市
104	男	貧農	60	1914	7		業校5年	河北省定興県
105	男	中農	41	1931	11	1951	初小	山東省無棣県
106	男	業主	26	1947	2	天津？	高中	河北省武邑県
107	男	工人	57	1917	5	1949？	小学4年	天津市西郊
108	男	貧民	66	1907	12	天津	3年(私塾)	天津市
109	女	下中農	50	1924	10	1946？	1年	河北省定興県
110	男	独労	23	1950	10	天津？	初中	河北省武強県
111	女	工人	30	1944	5	天津	初中卒業	天津市
112	男	貧民	64	1909	11	1932	私塾2	北京
113	男		64	1910	12	1927？	私塾3年	河北省定興県
114	男		65	1909	2	天津	小学1年	天津市
115	男		60	1914	6	1940	小学1年	山東省尚和県
116	男	貧農	66	1907	12		無	河北省静海県
117	男	員工？	60	1913	7	天津	小学4年	天津市
118	男	工人	62	1910	5	1922？	粗通文字	河北省静海県
119	男		66	1907	9	1922？	私塾3年	河北省霸県
120	男	工人	27	1946	6	天津	小学	天津市
121	男	工人	23	1950	12	天津？	初中卒業	河北省冀県

【表1】の続き

番号	性別	出身	年齢	生年月		天津での仕事開始時期	文化程度	籍貫
				年	月			
122	男	中農	51	1922	5		高小	河北省霸県
123	女	工人	55	1918	12	天津	不識字	天津市
124	男	貧農	67	1907	3	1922? (1931?)	2年(私塾?)	河北省滄県
125	男	革幹	20	1953	12	天津?	初中	山東省莘県?
126	男		50	1924		1938?	小学3年	河北省容城県
127	男	城貧	79	1896	9	天津	私塾1年	天津市

(説明) 空欄：履歴書に記載がないもの。■：判別できなかった字。

【表2】世代による学歴の違い(出身地域別)

(単位：人)

生年/ 出身地	最 終 学 歴																										合計
	無学	文盲	私塾				初等小学					高等小学				初等中学				高等中学				業校	中専	不明	
I 1896-1909	1	2	1	2	2		1																				9
天津			1	1			1																				3
天津以外		2		2	1																						5
不 明	1																										1
II 1910-1919	8	4			2	1	1	2	2	3		2		1										1			27
天津	1	1						1		2		2															7
天津以外	7	3			2	1	1	1	2	1				1													19
不 明																							1				1
III 1920-1929	2	1	1	2		3	2	3	2	1		2	2	2		2	1										27
天津	1	1				2	1		1	1		1	1	1		1	1										12
天津以外	1		1	2		1	1	3	1			1	1		1												14
不 明												1															1
IV 1930-1939						2	3	3		1	1	1	1		1	1											14
天津							2			1					1	1											5
天津以外						2	1	3			1	1	1														9
不 明																											0
V 1940-1949						1		1	1		1	4	2	6	1		2	2							1	1	23
天津						1		1			1	4	2	6	1		2	2								1	21
天津以外									1															1			2
不 明																											0
VI 1950-1960														15		1	7	2					1				26
天津														14		1	7	2				1					25
不 明														1													1

(説明) 最終学歴欄において「業校」は職業学校、「中専」は中等専門学校のことである。また、同欄の「在」は在学、「卒」は卒業、「1～5」は在学年数を表す。6年制小学校に5年以上在籍した者についての情報は、高等小学校の欄に記入した。